

毎日おかず1品…

日本民主青年同盟が全国で行う、コロナ禍で困窮する学生向けの食料支援に多くの人が訪れています。飲食店の営業再開でアルバイトは一部戻ったものの、支援を受けに来る人はとぎれません。訪れた学生に事情を聞きました。(小椋花恵)

関東地域の食料支援で、レトルト食品の洗剤などの支援物資を届いっばいに受け取った国立大学2年の女性(20)は連年の実家を離れてアルバイトで一人暮らし。「米は実家から持ってきて3パック70円の納豆を買うので1食23円」。毎日の食事はおかず一品、よく登場するのは納豆や豆腐、鶏むね肉、サケ、ピーマン。ほぼ自炊で、かかった食費や教材費をまとめて母親に報告し、送金してもらいます。1カ月で3万円を稼いだら、母親に「ちょっと足りない」と

民青食料支援 学生とぎれず

言われます。冊前に冷蔵庫を空にするため米だけを食べて過ごしたことも。「オンラインして勉強できます。毎日YouTubeに古いものを買いに行っただ」

公務員を目指して大学で法律の勉強中。「きちんとルール通りの法律は勉強するのが楽しい」といいます。家族の収入が規定以下の学生のための給付型奨学金を受けており、学費は減免。月6万円の奨学金を母親が管理し、3万5000円の家賃と光熱費などに充てています。申請時に知った母親の貯金は300万円。自営業の収入は不安定。父親は無職で収入も貯金もありませんでした。娘には「安定した公務員に」と望んでいます。

勉強に専念

入学当初はアルバイトをしていましたが、「その時間を勉強に」との親の希望で勉強に専念して

います。休日も勉強する気持ちはなりました。就いているのを興味が減っています。友人らとの交流は大学で話す程度にとどめています。「一人でいるのが気にならない方だ」といいますが、友人

がクリスマスパーティーの様子をSNSに投稿したら、奨学金と授業料の免除額が減らされます。ふたたび



食料支援活動で食料を取り、民青のメンバーに配る学生(手前)

親の生活も厳しい ■奨学金給付額上げて ■借金で大学入学

収入がなくなっても減額はほらくそのまま。女性は「親の生活は今も厳しい。給付の額を上げてほしい」と話します。

国が負担を

実家から私立大学に通学する大学2年の男性は、両親の借金で20万円の奨学金と100万円の授業料を準備しました。男性も月5万円の貸与型奨学金を受けています。

高校卒業時、両親は男性に就職するよう求めていました。会社員の父親とパートの母親の収入や住宅ローンなどの支出を示し、男性の学費を出せないでと説明を受けました。

「余裕がないのはわかったけど、どうしても税理士になりたくて、親に頭を下げました」。月2万から3万円のアルバイトの収入を自宅外の食費や交通費に充てています。両親から「自分の分は自分で」と言われたためです。

「なりたいた職業があるし、企業だって大卒じゃないと採用しないので、授業料がかかるのは変だと思っ」。大学まで国が負担すべきだと考えています。